

ZENBUTSU

全仏



No.
538

仏暦2551年 4月
[2008年]



(マニ車を回し、祈願しながら仏塔を巡る女性—チベット 撮影 田村 仁氏)

目次

——— 論点・視点 ⑮ 諸富祥彦「こころの危機」
加盟団体をゆく 第14回 東京都仏教連合会
NEXT50 ⑦ 田村 仁「上座部仏教と日本の仏教界を取材して考えたこと」
理事長諮問に対し、各審議会より答申書提出

論点・視点

15

11人の危機

いのちが、私している——中高年の自殺をめぐる——

日本トランスパーソナル学会会長 諸富 祥彦

「ああ、もうだめだ」……。いろいろすることがうまくいかず、また、どうあがいても改善せずにどんどん窮地に追い込まれていく。ここからでも疲れきってしまつて、「いっそ、死んでしまえたらラクになれるの」……。ふと、そう思つてしまう。私たち心理カウンセラーのもとには、当然ながらそんな方々がよく相談に見えられます。実際、中高年の自殺が後を絶ちません。とにかくこの時代は、生きるのがたいへんな時代なのです。

まず中年期から言うと、意外とこの時期は、働き盛りのようであり、仕事面でも家庭面でも危機的な場面に立たされやすい時期なのです。管理職になつて仕事の内容の変化にともなうまいを感じる方が少なくありません。特に技術者の場合、それまで自分の技術さえ磨いておけばよかつたのが、管理職になると部下の人間関

係のトラブルなどにも関与しないわけにいかなくなり、畑違いの仕事にパニックになつてしまうことがよくあります。それまで自分が培つてきた技術が通用せずに、呆然とします。思春期を迎えた子どもたちも、次々と難問を突きつけてきます。また、それをきっかけに、夫婦関係など、それまで見て見ぬふりをしてきた家族の問題に直面せざるをえなくなる場合も少なくありません。不登校のカウンセリングをしていると、お母様が「この子が学校に行けるまでは我慢します。けれど行けるようになったら離婚しましょう」などと会話がなされることはしょっちゅうです。

高齢期になると、さらに困難が増大します。老いには必然的に、「家族や親しい人との死別や離別」「収入の低下による経済的自立の喪失」「健康の喪失」「社会とのつながり

の喪失」など、さまざまな「喪失体験」が重なり、これが老人のむなしさ、空虚感をいっそう強めていきます。中でもとりわけ大きなダメージとなるのが「社会とのつながりの喪失」です。社会的活動から離れることで生きがいを失い、「自分はこの世で必要とされていない」という気持ち強めて、それがさらに老化を速めることになっていくのです。

中高年は、かように生きるのがたいへんな時期なのです。けれども私たちは生きていかなくてははいけません。では、どうすればいいのでしょうか。

もちろん私も心理カウンセリングを生業とする者としては、ぜひカウンセリングにきていただきたいと思ひます。いのちの電話というのもあります。死にたくなるほどつらいとき、ひとに話を聞いてもらえるだけで、ともかくほつとするものです。けれども、どんなにつらくても、カウンセリングを受ける気持ちがあり、いてこないこともおありでしょう。

あるいは、見も知らない人に悩みを話すのに抵抗がおりの方もおられることでしょう。そんな方のため、おすすめしたいのは、次の三つの方法です。

一つめ。まず、できるかぎり、すべてをプラスに考えることです。病気になるたり、財産がなくなつたり、人間関係のトラブルがあつたり、死別や離婚で妻(夫)を失つたり……。こうしたつらいことのすべてが、自分の「たましいの修行」の機会だと考えるのです。生まれ変わりを信じようと信じてまいいと、かまいません。こうしたつらいことすべては、私たちのたましいの向上のチャンスを与えてくれている。私は今、試されているのだ……。そうした視点(目的論的視点)を持つだけで、少しは前向きに生きることができようになる人がいます。この人生のすべての出来事には意味があり、目的がある。すべては気づきと学び、自己成長のチャンスなのだと思ひ、考えてみるのです。

二つめは、「脱同一化」と呼ばれるこの姿勢を保つことです。カウンセリングをしているとよくわかりますが、人生でどうしようもない悩みを抱えて苦しんでおられる方の大半が「考えすぎている方」です。考えれば考えるほど、心ががんにがらめになつていき、抜け道もわからなくなつてくる。考えれば何とかなると考えれば考えるほど、どうしよ

うもなくなっていく、こころのエネ
ルギーも枯渇していく、生きる気力
を奪われていく。そんな方がじつに
多いのです。つまり、私たちが死ぬ
ほどつらくなってしまっほうとうの
理由は、最初の落ち込みや妬み、憎
しみなどではありません。そんな気
持ちは多少の差はあれ、誰でも持つ
ものです。自分を追い込んでしまっ
人の特徴は、そんな自分をさらに責
めたり、あるいは、考えても仕方な
いことを考え続けることです。

「考えること」がすべての元凶で
す。したがって私たちカウンセラー
は「どうやったら、考えなくてすむ
か、考えずにすませる方法をいっし
よに考えていきましょう」などと提
案することがあります。悩みのタネ
について「考える」のをやめて、そ
れを「眺める」それによってその悩
みのタネと「間を取る」のです。そ
れは具体的には、自分のなかにどん
な気持ちが生まれてきたとしても、
ただそれを「ああ、こんな気持ち、
ここにあるなあ」「こういうった気持
ち、出てきているなあ」と認め眺め
ていく、という方法です。

何が出てきても認める。ただその
ままに認める。解釈したり、いじく
ったり、考えたりせずに、たとえ

死にたい気持ちがわいてきたら「あ
あ、死にたい気持ちが、ここにある
なあ」と、なにかを観察するかのよ
うな姿勢で、ただその気持ちの存在
を認め、確認し、眺めていく。ま
た、異なる気持ち、たとえば、どう
しようもなくさみしい気持ちがわい
てきたら、また「ああ、さみしい気
持ち、ここにあるなあ」と認めてい
く。ただひたすら、こうした作業を
続けていくのです。なあんだ、そん
なこと、と思われる方が多いかもし
れません。しかしこれが、やってみ
ると意外に難しく、しかもものすご
く効果的なのです。

たいていの方は、この二つの方法
をほんとうに体得すれば、すくなく
とも死にたいほどつらい気持ちから
は解放されることが多いように思い
ます。けれどもそれが案外難しい。
ではどうすればいいか。もうそうな
れば、とことん悩みぬくしかありま
せん。悩んで悩んで、悩みぬく。苦
しんで苦しんで苦しみをぬく。けれ
ども決して、死ぬことなどせず、最後
まで悩みぬき、苦しみをぬくこと
です。悩みや苦しみに執着しぬく。け
っしてお勧めできることではありません
せんが、もうそうするしかない、と
いう状態はたしかにあります。

悩み苦しみの塊になって悩んで悩
んで悩みぬく。苦しんで苦しんで苦
しみぬく。するとその極限におい
て、悩みそのもの、苦しみそのもの
が打ち砕かれるときがあります。突
如として、悩む苦しみから解放さ
れ、大いなるいのちの働きに自分を
ゆだねられるのです。

その時私たちは知ります。私が生
きている、とは、私がいのちを持つ
ているということではない。ほん
とうに存在しているのは、私とか、あ
なたとかといった区別を超えてお
り、また私とかあなたといった個々
の形に分かれる以前の、おおいなる
《いのちのはたらき》そのものであ
る。この、おおいなる《いのちのは
たらき》そのものがまずあって、そ
の《いのちのはたらき》が、私をして
いる。同じ《おおいなるいのちの
はたらき》があちらでは《花》とい
う形、こちらでは《草木》とい
う形、あそこでは《鳥》という形をと
っている。そしてその同じ《いのち
のはたらき》が、今・ここでは《私》
という形をとっている。

この空も、あの海も、今、私の眼
前にあるあの山も、むこうから聞こ
えてくる鳥の鳴き声も、野原でひっ
そりと咲いている花も、そしてもち

ろんこの私も、すべてはもともと一
つ。同じ《いのちのはたらき》の異
なった形なのである。私の肉体は死
によって消えてしまっほうけれど、私を
私たらしめている《いのちのはたら
き》はもともとあり、また、いつま
でもある。不生不滅の《いのち》
が、ある時は《私》しており、ある
時は《花》しており、またある時は
《鳥》しているだけなのだ。…この
いのちの働きそのものに目覚めるこ
とができるなら、生きるだの死ぬだ
のと悩み苦しんでいた自分が途端に
バカバカしく思えてくることでし
ょう。

諸富祥彦(もろとみよしひこ)氏
一九六三年福岡県生まれ。筑波大
学人間学類大学院博士課程修了。
千葉大学教育学部助教授を経て、
現在、明治大学文学部教授。教育
学博士。時代の精神(ニヒリズ
ム)と闘うカウンセラー。日本ト
ランスパーソナル学会会長。日本
カウンセリング学会常任理事。著
書に『人生に意味はあるか』(講
談社)『生きていくことの意味』
(PHP)など。
<http://morotominet/>

* 次回の「論点・視点」(五月号)は、
富田富士也氏にご寄稿いただきます。

加盟団体をゆく

《第十四回》東京都仏教連合会

今回の「加盟団体をゆく」第十四回目は東京都仏教連合会を訪ね、井上瑞雄会長にお話を伺いました。ご自坊となる瑞輪寺は身延山久遠寺の布教所として江戸時代に建設された歴史のあるお寺で、荘厳なたたずまいの中でお話しを聞くことができました。



井上瑞雄東京都仏教連合会会長

―仏教会の活動で、継続的に、また特に力を入れていらっしゃる点についてお話し下さい。

東京都仏教連合会では、最も大きな行事として十二月に毎年「成道会の集い」を開催しております。一般の方々にも広く仏教に触れる機会を作っていたきたい、という願いから開催しておりますが、毎年たくさんの方々にお越し頂き嬉しく思っております。

また、全日本仏教会で頒布している花まつりポスターを東京都仏教連合会加盟の全寺院に配布し、積極的な掲示につとめております。花まつりの普及、促進を通じてより幅広い方々に仏教に興味を持って頂きたいと考えております。他には、「関東大震災・都内戦災遭難者慰霊大法要」等の慰霊法要、赤い羽根共同募金への協力等を通じて、宗派を超えた社会活動・平和への活動を行っております。



毎年開催される「成道会の集い」

―昨今の様々な社会問題について、感じていらっしゃる思いをお聞かせ下さい。

「命の次に大事なものは○○だ」という表現がございますね。それくらい大事にしているものだ、という表現ですが、大前提として「一番大事なものは命」という前提があるので、この表現が成り立つわけです。

ところが、現代は親が子を、子が親を殺害するという、最も愛し合わなくてはいけない者同士が殺し合うという混沌とした世相にな

ってしまいました。
故藤井日光全日本仏教会前会長は、この問題に関して、ドイツと日本の比較のお話しをよくされておりました。

「第二次世界大戦において、日本とドイツは共に敗戦国だが、ドイツは宗教を教え、日本は宗教を一切教えずにここまで来た。それが今日の状況の一因である」

という要旨のお話しであったと記憶しております。現代社会において人々の生活の中に道徳心、宗教心が欠如していることは明らかであります。

学校で特定の宗教を教えるのが難しいのは百も承知ですが、人間として最低限のことを教える必要はありますし、我々宗教者も先頭に立たなくてはなりません。お釈迦様が説かれた命の尊厳を大切に、ということを人々に促す義務が仏教者にはあるのではないのでしょうか。

―現在の仏教界と今後の仏教界の在り方について、指針のようなものをお聞かせ下さい。

私個人は日蓮宗の僧侶ですので『法華経』を拠り所の教典としておりますが、本山身延山には同じ『法華経』を拠り所とした新興宗教団体の信者さんも沢山お参りに来ております。それを見て気が付く事は、お参りに来る年齢層が若い、という事です。険しい山でありますのに、幼児や乳のみ子を抱えながらお参りに来る熱心な方も珍しくありません。新興系団体は非常に勧誘が熱心である、という事もあります。それだけ一般の方が参加しやすい土壌作りがうまくできている、という事も言えるのではないのでしょうか。

伝統仏教界の各宗派の僧侶は、仏教は深遠で偉大な教えである、とお考えになっている方も多いいと思います。ですが、だからと言って僧侶が大上段に構えてはいけません。葬儀と法要にどうしても追われがちになるのは事実だとは思いますが、時間がいかに限られていても法話を行うよう心がけ、あらゆる手段を使ってお寺に若い人を惹き付ける努力を積極的に行う必要があるでしょう。

例えば、本堂で音楽をやってもいいですし、読経を一緒に行くことが精神的に癒しになる、という方もいらっしゃると思いますので、一緒に読経ができるような機会を提供することも喜ばれるでしょう。本山と呼ばれるような場所でしたら散策に若いカップル等多数訪れます。そういった需要に広く応えていくことがより大切になってきています。今、団塊の世代に神社・仏閣の散策をする事がひそかなブームとなつていようです。そういういった情報を素早くキャッチしていく体制づくりも大切ではないのでしょうか。

また、世界には様々な宗教が関係してしまつてい争い、宗教を利用して行われてしまつてい戦争があります。そういうた宗教間の対話や調停に尽力していく事が大切です。

日蓮宗寺院の「大聖恩寺」という寺院がドイツに落慶された際、キリスト教のカトリック教会の中心地であるバチカン市国からもお祝いの来賓に来て頂けたのは今でも非常に印象深い出来事です。言

うなれば、異宗教の活動拠点の建設をお祝いに来て頂けた訳です。我々仏教者も、仏教のもつ特性を理解するようつとめ、宗教間対話の促進に仏教界がより積極的に取り組み、世界平和に貢献していくことこそが、これからの仏教界の使命と言えるでしょう。

―昨年財団創立五十周年を迎えた本会の活動へのご意見・ご要望がございましたらお聞かせ下さい。

先にお話しさせて頂きましたように、社会の情勢が非常に不安定ですので、仏教界を挙げて人心の安定に尽力すべきと私は考えております。年々の事業のみならず、そういうた事業に関する情報収集や情報発信を行つて頂けると、非常に助かるのではないかと思います。

また、こうした取り組みには学校等の公的教育機関等との連携も不可欠になってくると考えられます。仏教懇話会等の会を通じて、仏教の教えを何らかの形で政治に反映させてゆく事も必要ですの

で、そういうた活動に力を入れて頂けたら、と思います。

東京都仏教連合会も、全日本仏教会も超宗派の団体でございますが、宗派間の対話を活発にする、懇親を深めるというのも非常に大きな役割だと考えております。宗教間対話を促進するにしても、仏教界内部がきちんと対話できているのが大前提となってきます。

これからの仏教はグローバルイズム、共生が大きなテーマとなつてくるのではないかと思います。全日本仏教会はその下地としての役割は非常に大きいと考えておりますので、困難も多いと思っておりますが、頑張つて頂きたいと思っております。

(談)

NEXT50

⑦

NEXT50への提言
上座部仏教と日本の仏教界を取材して考えたこと

写真家 田村 仁

上座部仏教との出会い

アジアで写真取材を始めて四十年になる。当時のアジアの国々は政治的にも経済的にも不安定な時代であり、主要な都市でもまだ高層ビルは少なく、仏教寺院やイスラームのモスクなど宗教関係の建造物が目立っていた。

アジアの国々の取材を重ねるに従い、アジアの人々の日常生活の中で宗教がいかに重要な位置にあるかを知ることになった。それ以来、仏教やイスラーム、ヒンドゥー教と多面的に宗教取材を続けるようになるが、とりわけ仏教寺院にはよく足を運んだ。

お寺の境内は何時でも老若男女の信徒たちで賑わい活気に満ちていた。人々は伝統的な精神生活を最も大事にしながら生きている人たちであった。

インドシナ戦争で見た
仏教弾圧と仏教の復興

一九七三年はカンボジアの戦場取材をしていた。その頃のインドシナ三国（カンボジア、ベトナム、ラオス）では激しい内戦が続いていた。



解放軍が占拠した仏教寺院に砲弾を撃ち込む（カンボジア）

首都プノンペンにはクメール・ルージュ（解放勢力）に包囲され、

市内は連日ロケット弾を撃ち込まれ、いつ陥落してもおかしくない状況にあった。平和な頃に取材したことのある戦場に向かう道筋の仏教寺院はことごとく焼け落ち廃墟化していた。そこでは、あれほど仏教を信奉していたはずの同じ民族同士が聖域である仏教寺院を中心に殺し合いをしていたのだ。



壁の戦場の戦場（カンボジア）で、寺院内の子供たちが焼け落ちた戦場には子供たちが描かれた様子

一九七五年、インドシナ三国は解放され社会主義政権が樹立された。しかしカンボジアはポル・ポトが支配権を握ると残酷で抑圧的な政治が始まる。多数の知識人や民衆が処刑され、その中には二万五千人近い僧侶たちが集団的に処刑されたという。残った僧侶はすべて還俗させられ、仏教は禁止された。お寺は破壊された。仏教を糧に生きてきた人々は精神のよりどころをすべて失ってしまう。

その後、ポル・ポト政権が崩壊

した後も内戦が続くが新政権は民衆教育に対する仏教の役割は大きいと認め、いち早く信仰の自由を保障する。

人々が戦後復興で最初に手掛けたのは、仏教寺院の再建であった。またたく間に二千数百の仏教寺院は再建され、久しく閉ざされていた祭礼や仏教の諸行事も再開されるようになった。民衆の仏教に対する情念が仏教を完全復活させたのである。

ただひたすらブツダの教えに忠実に生きている信徒たちの純粋性と情熱には感動させられる。

またラオスでは寺院内にマルクスとレーニンの肖像画が掲げられ僧侶たちは徹底的に思想教育が強いられた。信仰の自由を奪われた多くの僧侶や信徒たちはメコン河を渡りタイ国側に逃亡していった。数年後たまりかねた政権側は、仏教の教えと社会主義は矛盾しないと宣言し、仏教は合法化されることになる。

タイ国の仏教
社会変動の中での在家救済

タイでは近代教育制度が始まる前は、子供の教育が僧侶によって

行われていた伝統がある。今でも大きなお寺では、経済的な理由で進学できない子供たちのためにお寺が中学や高校を運営し、修行しながら学ぶ修学僧を多く受け入れている。また急速な経済発展の裏でエイズや麻薬患者などが多発した。そして女性の社会進出に伴い、さまざまな悩みを抱える女性が多くなり、これら弱者の救済に乗り出すお寺が次第に増えている。

このようにインドシナ、タイ、その他、私が取材した様々な上座部仏教の諸国では、お寺と在家の人たちが協力しあいながら、時代に適応した仏教のあり方を常に模索している。お寺と在家の快い信頼関係を見ていると仏教の存在感をひしひしと感じずにはいられない。

仏教界だからこそできる 「アジアの縁」の拡がり

上座部仏教を信奉する国々は親日的な人々が多い。仏教教義に違いがあってもお互いが仏教徒というだけで親近感もてるのは仏教精神による心のやさしさに共通点があるのではないか。私個人も、

長いアジアの仏教取材の過程で同じ仏教徒というだけでどれほど助けられ親切にされたか数え切れないほどである。企業人や一般旅行者でも同じような体験をした人は多いのではないだろうか。

アジアの人々と仏教を通じて良好な関係を築ける可能性を感じる反面、国内におけるアジアの上座部仏教に対する誤解や偏見に遭遇する機会が多いのは非常に残念と言わざるを得ない。「大乘仏教」

「小乗仏教」という言葉でひどくくりにし、上座部仏教は「己の解脱のみを求めて民衆とかわわっていない」というイメージを持っている方も未だに多いようだが、少なくとも私は四十年に及ぶ海外での上座部仏教の取材生活において、人々がお寺や僧侶と快い信頼関係を築いている現実を置き、「生きた仏教」を肌で感じる事ができた。

敢えて苦言を言わせていただければ、今日の日本仏教界に欠けているのは、この上座部仏教国で実現されている「在家の人と僧侶との生きた繋がり」の具現化ではないだろうか。

それでは、「田村は日本の仏教

界は何もしていないというのか」と問われると、矛盾しているかもしれないが、「そんなことはない」と断言できる。事実、私個人が親交を持つ僧侶や寺院も、人々の求めに応じるべく様々な取り組みを行っている。全日本仏教会の記念事業である財団創立五十周年記念式典・第四十回全日本仏教徒会議神奈川大会を取材した際も、国内における仏教信仰の熱心さに触れることができた。また、築地本願寺で行われた「東京ポーズコレクション」の取材の際には、特に若い僧侶たちのエネルギーや可能性を多いに感じた。

そこでは仏教に対して様々なものを求めて集う多数の人々の姿を目にすることができた。

そうした取材を通して思うのは、一般の人々も仏教に対し様々なものを求めている。寺院もどうかしようとして暗中模索している。それがお互いに充分に伝わっていない。コミュニケーションが上手なくとれていないのだ。非常に残念なことである。

日本の仏教界が努力をしているにもかかわらず、世間の認知度が低い。その為に「生きた繋がり」

がなかなか築けない。そうした状況にぶつかる度に思うのは、一旦には広報的な問題があるのではないだろうかということだ。非常に良い取り組みがおこなわれているにもかかわらず、取材に關しての制約事項にぶつかり十分な取材ができず、とてももったいなく感じってしまう事が多々ある。取材内容にもよるが、可能な範囲で制約の緩和を是非行って頂きたい。

本年十一月にはWFB「世界仏教徒会議日本大会」が開催される。特に若い僧侶たちの国際交流を積極的に計って欲しいと切に願う。大乘仏教、上座部仏教の垣根を越え、誠意ある信頼関係をアジア諸国と築き上げ、「アジアの縁」を具現化する好機と思われる。その為には「地域の縁」の構築も欠くことができない。

だとすれば、一般の方々を巻き込んだ広報的な展開をより積極的に行う必要があるであろう。

今、世界はさまざまな危機的な課題を抱えている。これらの諸問題の解決に向け、日本の伝統仏教界が中核的な役割を果たすことを期待したい。

理事長諮問に対し、各審議会より答申書が提出される

第二十七期理事長諮問に対し各審議会（総務財政審議会・社会人権審議会・国際交流審議会）では慎重審議を進め、この度各審議会委員長より答申がなされた。

総務財政審議会

諮問

1、負担金について

過去十年据え置かれてきた負担金を見直し、公益法人として継続性ある組織への財源基盤の再構築に向け、指針および方策をお示し願いたい。

2、賛助会員について

本会の寄附行為第三十七条に新設された賛助会員に関して、具体的にどのようにするかその指針および方策をお示し願いたい。

答申

一、負担金について

負担金については、平成九年度に改定がなされて以来十年余に亘り、見直しがなされていない。バ

ブル崩壊以後、景気低迷や地方離れが加速し、社会構造が大きく移り変わる中で、仏教界を取り巻く状況も厳しさを増しており、加盟団体においても財政逼迫、傘下の寺院数減等により負担金に対する不公平感や納付に苦慮している状況が見受けられるようになってきている。

一方で信教の自由および政教分離にかかわる諸問題や加盟団体共有の課題の対応など、政官庁から伝統仏教界の窓口としてみられている全仏の役割は、一層重要になっている。

このような状況下で、負担金について審議会において慎重に検討をすすめてきたが、現下、公益法人制度改革が進められる中で、関連三法（新制度）施行にかかる政令・府令等が検討最中であったことや、全仏にあっては加盟団体へ財団創立五十周年記念事業の募財中でもあるため、新制度移行にむけて財政全般にわたり検証をおこない、負担金については、ひきつづき不公平感の是正や、算出要素

の見直し、適正な予算規模など、更に議論を深めていく必要がある。

なお、改正時期については記念事業が終了する平成二十一年度以降におこなうことが望ましい。

二、賛助会員制度について

賛助会員については、寄付行為第三十七条「この法人の目的に賛同し、別に定める会費を納入して、この法人の活動を支援する者を賛助会員にすることができ」に基づき、運用にあたり具体的な検討がなされた。

賛助会員制度を導入することにより、関係が薄かった県レベルの仏教会未結成の地域仏教会や、本山クラスなど組織強化の観点から有効なことであり、財団法人として、門戸を広げることが公益を担う上で、担保となりうると思慮する。

また、財政の面から考えると、全仏はこれまで加盟団体からの負担金ではほぼ運営されてきているが、財政の安定を図るためには、加盟団体以外からも収入の道筋を確保していくことは必要と考える。

社会人権審議会

諮問

一、日本国憲法改正論議における

本会の対応について

二、靖国神社への首相及び閣僚の公式参拝中止の要請について

三、同和・人権問題への対応について

答申

一、日本国憲法改正論議における本会の対応について

本会は、我が国の伝統仏教界における宗派を超えた連合体であり、仏陀の和の精神を基調とした仏教文化の宣揚と世界平和の進展に寄与することを目的としています。

日本国憲法改正論議については、多方面からの国民的な議論が必要です。依って本会においても、生命を尊重し、互いを認めて共に生きる社会と非暴力による平和社会の実現をめざす仏陀の教えに基づき、積極的に意見を表明していく必要があります。

今後は加盟団体内の論議を充分に進め、仏教徒としての共通認識に立った見解を持つために、審議

を継続することを希望します。尚、審議の内容として、さらに検討を深めるべき課題を下記のとおり提示して答申と致します。

記

① 仏教界が憲法改正論議に対して意見を述べる理由とその意義について、わかりやすく表明する。

② 日本国憲法の中の「平和への誓い」「人権」など日本国民として絶対尊重すべき項目について、本会の見解をまとめる。

③ 日本国憲法改正論議に対する加盟団体の現状を把握し、本会の見解に対して理解を得られる方策を検討する。

二、靖国神社への首相及び閣僚の公式参拝中止の要請について
本審議会は、「信教の自由」と「政教分離」の原則と伝統仏教界が先の大戦に協力をしたことへの反省を踏まえ審議を行い、「靖国神社への首相及び閣僚の公式参拝中止の要請」文を成文致しました。要請書は、別紙の通り添付いたします。また、要請後に首相及び閣僚が公式参拝された場合、抗議書を提出する必要があることを

申し添えます。

三、同和・人権問題への対応について

本会は仏教徒として、すべての差別撤廃とその啓発を進めてまいります。本会が現在まで取り組んでまいりました部落差別問題を含め、人権に関する様々な問題を取り組むために、加盟団体が相互に情報や意見の交換を行うことは、重要な役割を果たすものであります。そのための機能を本会が有しており、本審議会や同和・人権問題連絡協議会等を十分に活用していくべきと思われまます。また、今後の課題として「部落差別」「人権」「同和」等の問題を鑑み、呼称を検討する必要があります。

尚、本会の部落差別・同和問題の取り組みの記録として『全仏同和委員会二十六年の歩み』を添付いたします。

国際交流審議会

諮問

本会の寄付行為第五条四項には、その目的として「WFB（世界仏教徒連盟）及び各国仏教諸団

体との連絡と交流の促進」とある。今後本会が国際交流を進めるに当たって何に重点を置き、具体的にどのように展開するかその指針および方策を示し願いたい。

答申

寄付行為第五条四項「WFB（世界仏教徒連盟）および、各国仏教諸団体との連絡交流の推進」を基調に、本会の目的である仏教文化の宣揚および世界平和の実現を図るため、WFBとの関係を軸に今後一層の国際交流を推進することが望ましい。

具体的には二〇〇八（平成二十年）十一月、東京で開催される第二十四回世界仏教徒会議を契機として、その準備期間、会期およびその成果を以て、WFBおよび世界各国の仏教諸団体とのより一層の相互交流並びに協力関係の構築を図ることが期待される。また国際交流事業が積極的に展開出来る財政的基盤を確立することが望まれる。

特に以下の点を以て具体的内容とする。

① 広報・情報交流の活発化
外部有識者の意見を聴取し、

② 仏教界に必要な内外の情報交換・提供や資料収集を行うネットワークを構築する。また機関誌『全仏』、各種出版物、本会ホームページ等のメディアを活用し、本会の目的である全一仏教運動の推進と広く内外に日本仏教に関する情報発信を行う。

③ 救援基金の活用
本会に設置されている「救援基金」を周知し、内外の災害被災者救援及び各種事業への支援に効果的に活用する。

④ 国際的な仏教文化活動への参加
国際会議・行事等への積極的参加を通じて、日本仏教の実像を広く正確に伝える努力を行う。

⑤ 国際的仏教人の育成
世界仏教徒会議開催に向け平成十九年四月より開催している「仏教英語プログラム（BEP）」を継続し、未来を担う国際的な仏教人を育成する。

第七十四回 WFB世界仏教徒連盟 執行役員会議開催

二月十五日(金)、第七十四回WFB(世界仏教徒連盟)執行役員会議がタイ国バンコクにあるWFBの本部にて開催された。

本会からは、戸松義晴執行委員(国際交流委員)が出席し、本年十一月十四日〜十七日に開催される、第二十四回世界仏教徒会議日本大会の骨子、付帯事業の概要について説明をし、概ね了解を得ることに至った。

ただし、企画内容に対して建設的な意見もあり、今後、大会円成にむけ、本部との連係の中で詳細を詰めて準備を進めることを確認。

本大会の概要は、三月二十七日開催の理事会・評議員会・参与会での報告を行い、次号に掲載予定。

(財)東京都慰霊協会主催 関東大震災・都内戦災遭難 者春季慰霊大法要厳修

三月十日(月)、関東大震災・都内戦災遭難者春季慰霊大法要が東京都慰霊堂にて、多数の遺族関係者が訪れるなか、真言宗豊山派護国寺一山式衆により厳修された。

岡本永司護国寺大僧正は法話の中で、「六十三年前の東京大空襲では、墨田区の被害は甚大で、区のうち七〜八割が焼夷弾の火に包まれた。多くの被災者や残された遺族の怒りや悲しみは決して癒えることはないが、少しでも鎮魂してもらおうよう心を込めて法要を厳修させていただいた」と述べられ、ご自身も四月十三日の空襲で板橋の自坊で被災され、「あの恐怖や悲しみは決して癒えることがない心の傷として残っている。こうした大法要を営むことで恒久平和への誓いと犠牲者の鎮魂と遺族の心の平安を願いたい。」とお話になられ、謙虚に生きることの尊さを説かれた。

アニメ仏物語り

親鸞さま

ねがい、そしてひかり
完成記者発表会開催!



三月六日(木)、浄土真宗本願寺派築地別院において、本会推薦のアニメ「親鸞さまねがい、そしてひかり」の完成記者発表会が開催された。

同作品は親鸞聖人七五〇回大遠忌法要記念作品として浄土真宗本願寺派が制作した。

親鸞聖人の幼少期からの生涯を、主人公の親鸞聖人が語るという今までにはないスタイルの作品となっている。

「心の空洞化が叫ばれている今

日の社会にあって、このアニメが織りなす様々なドラマが、現代に生きる人びとに潤いと喜びをもたらす一助となればと願っております(制作者より)

DVD/VHS 一〇八分

価格(税込み)

三九九〇円(本体価格三八〇〇円)

※ご注文の際、発送梱包手数料はかかりません。

制作著作

浄土真宗本願寺派

企画・販売

本願寺出版社

〒六〇〇―八五〇―一

京都市下京区堀川通花屋町下ル

TEL 〇一二〇―四六四―五八三

FAX 〇七五―三四一―七七五三

公式サイト

<http://hongwanji-shuppan.com/anime>

com/anime

事務総局録事

二月(十一～二十九日)

十二日▼局内会議

十三日▼仏教英語プログラム

▼第二十二回人權啓発研究

集会出现(至 十四日)

▼WFB執行役員会議(於

バンコク 至十六日)

十四日▼全日本宗教用具組合主催

コンテスト参加

▼無料法律相談室

十八日▼五十周年記念誌編纂部会

十九日▼写真家田村氏と打合せ

二十一日▼日本宗教連盟幹事会

▼東京都仏教連合会取材

▼公益法人に対する説明

会参加

二十五日▼社団法人部落解放研究

所第六十七回総会出席

(於 大阪)

二十六日▼電通・大村印刷来局

▼ICS来訪

二十七日▼事務連絡会議

▼仏教英語プログラム

▼民主党事務局と懇談
二十八日▼JTB・ICSと打合せ

▼無料法律相談室

三月(一～十日)

三日▼事務総局連絡会議

▼記者懇談会

▼部落解放同盟第六十五回全

国大会出席

四日▼融通念佛宗取材

五日▼勸募部会

六日▼平岡秀夫議員パーティー

出席

▼アニメ念仏物語「親鸞さま

ねがい、そしてひかり」完

成記者発表会出席

七日▼日本宗教連盟 理事会・参

議会・幹事会

▼全国青少年教化協議会主催

「お寺の公益性を考えるシ

ンポジウム」出席

財団創立五十周年記念事業 特別協賛金

「寄付者」

(二月十日～三月十三日)

精明寺

鳥取県厚生保護給産会

(順不同・敬称略)

ご支援ありがとうございます。皆様のご支援・御協力をお待ち申しあげております。

【郵便振替】

口座番号

0013006137600

口座名義

財団法人 全日本仏教会

【銀行振込】

三井住友銀行 浜松町支店

口座番号

普通 7082913

口座名義

財団法人 全日本仏教会

訂正

前号(五三七号)十四頁、東京ブレイストクラブ成道会の記事において誤りがございました。

誤 NGOMコンボランティアに対して寄付金百万円が贈呈された。

正 NGOMコンボランティアに対して寄付金が贈呈された。

謹んで訂正させて頂きますとともに、不手際により大変ご迷惑をおかけしましたこと、関係各位に心よりお詫び申し上げます。

*今月より表紙の写真は、田村仁氏(写真家)による「祈りの世界」シリーズを掲載します。世界各地の祈りの風景を写真と文章にてお伝えしてゆきます。また、表紙に関連し仏像写真もあわせて表紙写真解説のページに掲載させて頂きます。

祈りの世界①チベット

チヤンタン高原に生きる遊牧民

チヤンタン高原はチベット北西部に位置し、未解放地が多く、誰でも入城できるわけではない。いくら走っても集落らしきものは見あたらず、野生のロバやチルル、ガゼルなどカモシカの仲間が群れをなしている。たまに見かける遊牧民は高地に順応するウシ科のヤクや羊を糧にして、ヤクの毛で編んだ黒いテントに住み、自給生活を営んでいる。人々は四千メートル以上の極限の高地で、家畜の恵みにささえながら生きる敬虔な仏教徒たちである。



セラ寺集會殿の本尊仏、
弥勒菩薩像

無料法律 相談室

長谷川正浩顧問弁護士による、無料法律相談を毎月第二、第四木曜日の午後開催しております。本会事務総局03(3437)9275へ事前予約の上おいで下さい。

平成20年醍醐寺霊宝館春期特別公開

世界遺産醍醐寺展

『やすらかな白描の世界と醍醐の春』

醍醐寺に伝承する白描図像を中心に約60点を展示いたします。

「重文 求聞持法根本本尊」「重文 普賢延命像」など、鎌倉時代まで遡る白描の名品の数々に加え、「倭花名品」など春らしい品々が展示されます。

是非、この機会に訪れてみてはいかがでしょうか。

会場：醍醐寺霊宝館（京都市伏見区醍醐東大路町）

開期：3月22日（土）～5月11日（日）

時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

入館料：大人600円、中学・高校生300円

詳細：URL：<http://www.daigoji.or.jp/>

アクセス：京都市営地下鉄「醍醐」駅下車、徒歩約10分

お問合せ：電話075-571-0002



重要文化財 虚空蔵菩薩像

平城遷都1300年記念

国宝薬師寺展

National Treasures from Yakushi-ji Temple

2008年3月25日（火）～6月8日（日）東京国立博物館 TNM

本展覧会は、平城遷都1300年を記念して開催するもので、日本仏教彫刻の最高傑作のひとつとして知られる金堂の日光・月光菩薩立像（国宝）がそろって寺外で初公開されます。薬師寺の歴史と美のエッセンスをお届けする本展覧会は、空前絶後といっても過言ではない質の高さを誇り、かつて見たことのない「薬師寺」をご覧いただける絶好の機会です。どうぞお楽しみに。

会期：2008年3月25日（火）～6月8日（日）[67日間]

会場：東京国立博物館・平成館 [上野公園]

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日他、詳細は03-5777-8600（ハローダイヤル）までお問い合わせ頂くか、下記ホームページをご参照下さいませ。

東京国立博物館ホームページ <http://www.tnm.jp/>

薬師寺展展覧会ホームページ <http://yakushiji2008.jp/>



国宝 月光菩薩立像